

「自然遊びで育む生きる力」

枚田みのり保育園（兵庫県）

<https://k-fukushikai.com/minori/>

取組の目的・背景・沿革等

🌿 地域の環境や状況

当園は兵庫県の山間部に位置し、雲海に浮かぶ姿から『天空の城』で広く知られた竹田城跡の麓にある。昭和26年に開設し、平成28年4月から幼保連携型認定こども園に移行した機会に現在の施設を建設した。その時こだわったのは、自園の保育理念に施設環境を適合させることであった。

乳幼児期の教育・保育の基本的な考え方は保育所保育指針に示されているところだが、具体的に保育に取り組む手法や環境設定は、それぞれの地域性や園の独自性、創意工夫が尊重されている。私たちの地域は周りが野山に囲まれ自然豊かな環境に恵まれているが、自然に触れるには園外に出る必要があり、常に自然遊びが出来るわけではなく、いつそのこと園庭に自然を持ち込もうと考えたのがビオトープであった。

計画に当たり粘土で園庭のジオラマを作り、小さな山に小川や池を配置し、保育園が子どもたちの心の故郷になりたいという思いもあり、植え込む草木は地元で生息するものを使うなどこだわった。さらに、季節や日々変化する自然環境との遊びを通して、一人ひとりが異なる様々な発見や関心興味を持ち、新しい遊びに発展し、時にはクラスの活動につながることも期待した。保育理念の「一人ひとりを大切に自らの経験を通して学ぶ、子どもの健やかな育ちの環境づくり」を目指した。

取組の概要

🌿 実施体制について

最初は保育士の戸惑いや、安全確保ができるのかという保護者の声もあったが、何よりも子どもたちが楽しく遊ぶ姿や、自らが工夫して創造し遊ぶ活動に心配は払拭された。その具体的活動内容の事例のいくつかを紹介する。

①モリアオガエル

園庭の池には天然記念物のモリアオガエルが産卵にやって来るようになった。「これは大事な卵だから」と保育士が声を掛けると、触らずにずっと見守ってくれる。木に産みつけた卵が池に落ちてオタマジャクシになりカエルになる様子や、毎年産卵に来ることを知り、命が受け継がれていることから「命の大切さ」を学ぶ。折り紙でモリアオガエルを制作し、目を描こうとした時、「目の色は何色かな」声掛けをする



と、早速撮影した写真を見て図鑑を調べ、モリアオガエルは目の色が赤色と知り、他のカエルの目は黄色が多いことに気付いた。カエルの興味はクラスに広がり、水槽で飼育して動きを観察し、更に池に来るカエルの種類や名前を覚え、違いに気付き関心が深まった。

②植物遊びや、タケノコ遊び

園庭には地域の草花や樹木が100種類以上あり、沢山の小さな花を咲かせ実を付ける。それを見つけて遊びを工夫するのが楽しいようだ。エゴの実やネムの木の葉っぱを使った石鹸あそびもその一つだ。容器で葉っぱと水をかき混ぜ石鹸を作り、泡立ちは時間が経つほど良くなる大発見をした。タケノコは近くの竹やぶから採ってくる。皮をはがし、何層も重なっていることや、包丁で半分に割ると中に節があることに気付いて、皮を帽子にして遊んだり、草花を詰め込んだお弁当作り、竹コップ、竹ぼっくり、船作り、版画制作などをしたりと、子どもたちのアイデアから沢山の遊びが広がった。



取組による効果

🌿 子供・保護者への影響

当園の運動会は練習をしない、保護者・地域の方々の参加による「ふれあい運動会」である。保育園に隣接した地域の運動場を借りるが、園庭を利用する種目では自然遊びを取り入れ「親子のふれあい」をねらいに保育士が種目を工夫している。園庭に生息している草花の名前や匂い当て遊びなどを親子で楽しむ。「えーっ、そんなん知ってるんや」と教えられて驚く親の光景が多く見られ、子どもの成長や興味関心を知り、日頃から取り組んでいる自然遊びの意義を親子のふれあいの中から感じてくれる。



取組を通じて全体的な所感

ここに紹介したのは事例の一部である。自然環境は日々無限の変化をもたらし、子どもの遊びも無限に広がる。その遊びの過程において、ひらめきや創造力、我慢や協調性など非認知能力が育まれ、それは今の子どもが大人になる頃のA1と共存する社会に生きる力となる「人間らしさ」の育みだと思っている。

様々な行事に自然遊びを取り入れることで、保護者や地域の方々の関心や理解も広がってきた。これからも自然遊びを通して、子ども・保護者・保育者がふれあい、育ち合い、更に故郷を大切に作る地域づくりの一端を担うことができると考えている。